

平成27年度 知事と県民の意見交換会概要

テーマ：Aターン促進！若者定着に向けた元気創出

日 時：平成27年6月30日（火）14：00～16：30

場 所：鹿角市文化の杜交流館「コモッセ」こもれびひろば

(知事あいさつ)

お忙しいところお集まりいただき感謝申し上げます。

毎年いろいろな分野で県政の課題について関係の皆様と意見交換を行っている。地域によっては産業振興、あるいは子育てなど課題があるが、今回特に重視しているのは若い方を中心に町おこし、地域づくりなどに取り組んでいる方々から直接お話を伺うことである。

現在、現実問題として人口減少が激しく自治体がなくなるというおそれが指摘されている。

経済的には自分たちで稼ぐというよりは、ほとんどが東京からの富の環流であり、東京からの環流が少なくなると自治体ばかりか国もなくなるおそれがある。

そこで、なんらかのアクションを起こす必要があり、「まち・ひと・しごと」の取組が必要になる。

一つの「まち」を維持していくには、人と仕事が必要である。今しなければならぬことは、自分たちの「まち」は人に頼らず自分たちで形作っていくという動きを増やすことである。

秋田は日本全国で最も人を頼る傾向が強い。これからは自分の頭で考え、自分で汗をかき、自分で「まち」をつくる必要がある。

皆様は自主的に物事に取り組んでいると聞いている。県としてもどのようにお手伝いができるか、皆様の意見を聞いて考え、勉強していきたいと思う。

※知事あいさつの後、同会場にて「伝説の里 でんぱく」の発表を見学。

【参加者自己紹介】

(A氏)

「かづの若者会議」に所属している。実家は八幡平で温泉業を営んでいて、私自身は2年前にUターンをした。

「かづの若者会議」は、昨年末に若者有志で結成したものである。地元で暗い雰囲気を感じる中、若い世代で何かできないかという思いで始めた。この半年間で世代間交流を中心に行ってきたり、地元に対してさらに新しい発見ができたし、地元での暮らしがより楽しくなってきたと実感している。

これからも、若い世代に地元の良さを知ってもらえるような活動を続けていきたいと考えている。

(B氏)

小坂（こざか）地区で子ども会に10年間携わっている。小坂地区は管内でも小中学生の子どもの数が80人程度と最も多く、子ども会を盛り上げたいという気持ちで活動をしてきた。

地元の高校ではPTA役員を務めている。高校卒業生のうち地元就職するのは10人から15人程度である。また、市外、県外の大学へ進学する場合は仕送りなどで苦勞している者が多いという現状で

ある。

いったん県外に出ても地元に戻ってきてもらいたいが、なかなかそうもいかない。そうした状況を打破したいと親世代は考えている。

#### (C氏)

GET UP PROJECTとして仲間を集めて楽しいことやイベントなどを発信していこうという活動をしている。

鹿角といたらホルモンという考えがあったので、ホルモンを使ったイベントを行ったことがある。

今は婚活イベントに力を入れている。今までの婚活イベントはある地域の中でのみ開催されていたが、他の地域からバス送迎などにより、連携してイベントを開催したいと考えていて、県内25市町村を巻き込んだ婚活イベントを行いたい。そのためには県の手助けが必要と感じている。

#### (D氏)

鹿角地域には様々な観光資源があるが、いつまでも既存の観光資源に頼ってはいけないという思いもあり、でんぱくを始めた。

観光業の営業の際は、担当一人の力では限界があるが、鹿角地域全体を売り出そうという流れになっている。本日参加の皆さんからも様々なおもしろいメニューを提供していただいている。そうしたおもしろさを各所に情報提供して行けたらと考えている。

#### (E氏)

山菜採りの代行サービスを行っており、この取組が環境大臣賞を受賞した。受賞してからというもの、売り上げが3倍ほどに増加している。現在、小坂、鹿角、大館で採れるミズ（ウワバミソウ）を全国に出荷しているところである。

関東、関西、九州、沖縄在住の方からも注文があり、商品を届けると秋田の山菜はおいしいと反響がある。

環境大臣賞受賞を契機に全国メディアにも取り上げられていて、問い合わせも多い。秋田は山菜の宝庫であるが、山菜採りをする人が少なくなっている。地元にいる若い人の中でも、山菜を食べないという人が増えてきている。そうした中で、山菜を使った料理のレシピなども考案して、山菜の魅力をもっと発信していきたいと考えている。

#### (F氏)

商店街の振興組合の事務局を数十年務めている。今日の他の参加者は私の子ども世代に当たる方が多く、このような場に参加できることを大変楽しみにしてきた。

鹿角の良い点をいかに次世代に継承していけばよいかということを考えており、今日皆様のお話を聞いて自分自身にも喝を入れていきたい。

#### (G氏)

鹿角のエネルギーを考える会から参加した。宮城県仙台市から鹿角市にお嫁に来て11年目になるが、全てが目から鱗の状態である。とにかく鹿角の魅力を伝えたいと思って活動してきた。

3. 11（東日本大震災）により、地元が壊滅状態になったとき、エネルギーのことを考えるよう

になった。エネルギーを自給するという理念の元、活動を行っており、千葉大学の倉阪（秀次）教授が提唱したエネルギーと食糧の自給率が100%を超える永続地帯という概念に活動当初初めて触れ、鹿角市は日本全国の市の中で自給率が最も高い、ということも初めて知った。

そうした事実をもっと市民の皆様に伝えていきたい。木質バイオマスを使った熱利用を模索しているところである。

## 【意見交換】

(F氏)

商業や医療、教育環境、交通が整っている地域に住みたいという若者が多い。商店街に空き店舗ができた場合はカラオケや総菜屋さんなどを立ち上げている。空き店舗対策により立ち上げた直売所は大繁盛で、いとく（株式会社伊徳）にヘッドハンティングされた経緯もある。

商店街に対する危惧があり、何とかしなければならないという思いもある。マックスバリュ（花輪店）が閉店になり危機感がある。県からの協力を求めることもあるかもしれない。

三人の子どもにめぐまれ、うち二人は県外へ転出した。秋田には仕事がないと言われ、県外へ出すこととなった。鹿角地域にも大学があれば願っている。

また、先進の医療技術がある病院が鹿角にもあれば潤うと思う。権威のある医者がいれば、様々な業種に波及していくと思っている。

今日この場にいる皆様は子育て世代である。子どもには、必ず地元に戻ってくるよう言い聞かせてほしい。また、県外から結婚相手を連れてこられるような子どもに育てられれば、という思いもある。

(C氏)

1番上の子どもは高校2年生で、来年進路を決める時期である。大学に進学するとなると市外、県外に行くことになるが止めることはできない。

(知事)

大学は日本全国で減少させる方向にある。また、大学を有していない地域でも人口が増えているところもある。すべてが大学の問題というわけではない。

(C氏)

都会に行った友人から話を聞くと、イベントなどは誰かが営利目的で開催するが、田舎では自分から開催しないとイベントはない。そこで、ないものは作ろうという思いから活動している。

(知事)

自分の子どもは秋田に戻ってきた。自分の道は自分で決めるという訓練を徹底してきたと思う。人に頼らず、自分で生きていくという教育をすると、地元に戻ってくる。また、見果てぬ夢を見ることは無駄だという現実も教える必要がある。

(B氏)

子どもが三人いるが、全員花輪ばやしに参加している。1番上の子どもは大学4年生で県外の会社に就職活動中であるが、将来は地元に戻ってきたいと思っているようだ。また、もし地元で仕事がな

いのであれば起業したいということも話しているが、そのための勉強を都会でしたいと考えているようだ。

子どもが結婚するのを機に地元に戻ってきてほしいという思いもあるが、なかなか結婚相手が見つからないのでは、という危惧もある。

親世代は地元で暮らしているが、暮らすにはとても良いところだと感じている。東京にいる娘は、地元のことを水や酒がおいしく雑音が無いとても良いところだ、ということを周囲に情報発信しているようだ。

訪れたことのない県第1位とも言われることがある秋田県だが、そういう状況を打破したいと考えている。

(知事)

でんぱくの企画はどのように広報しているのか。

(D氏)

観光施設やホテルなどとも連携し、パンフレットを日本全国に配っている。

(知事)

婚活イベントは狭い地域でやると集まらない。ある程度離れた地域とやると良いのでは。

(C氏)

能代や青森と婚活イベントをやっているが、県南の方とも開催したいと考えている。

(知事)

でんぱくをやるにしても、必ず地元の人を通じて取りかかろうとしていると思う。地元の人とも付き合うという力が必要。

秋田だけではないが、農村部は序列により生活してきた。都会になると序列がない。序列がないところに若い人は来る。若い人が地元に着かない理由はここにあると思う。

また、大企業を地元へ誘致してくるというのは、現在は難しい。国が行っている「まち・ひと・しごと」というのは、自分で仕事を作って、「まち」を運営していくというものである。今までは商売にならなかったようなものでも、始めてみると人が動く。人が動くとお金も動く。

仙北市の乳頭温泉郷などの温泉経営者は、年中営業活動を行っている。また、仙北市では地方創生特区制度で医療関係の取組も行っている。病院を作るといっても、誰かが作ってくれるわけではない。自分たちで作らなければいけない。

木質バイオマスはどうなのか。

(G氏)

発電には向かないが、熱エネルギーとして小さいコミュニティの中で供給していけるような仕組みができないかと模索している。また、小さいコミュニティの中でエネルギーの需要と供給を完結させるオフグリッドという仕組みが鹿角でできればと考えている。

(F氏)

Gさんも四人のお子さんを育てている。よく鹿角に来てくれたと思っている。

(G氏)

都会に暮らしていたころよりは収入が減ったが、それ以上の遊びや恵みなどで生活の充足感がある。都会の暮らしに疲れてしまった人を連れてくることは可能だと思う。そのためのマッチングをどのようにするか、自分の生活の楽しさをいかに発信するか、ということで悶々としている。

(知事)

今の若い世代はある程度生活に余裕があるが、我々より上の世代は生活に余裕がなかった。そのためか、意外と地元のことを知らない人が多い。すると、地元には何もないと卑下してしまう。ここには日本最古の鉱山である尾去沢鉱山や、ユネスコで認定された大日堂舞楽などもある。これらを発信していけば様々なものがぶら下がってくると思うが、それがまだ足りないと思う。

(G氏)

夫は地域の青年会と消防団に入りたくて地元に戻ってきた。それは親が青年会や消防団で活動している様子を子どものころから見ていたことで、自分も青年会などに入るように自然と意識していたのだと思う。青年会活動をする際は、子どもにもその様子を見せると良いと思う。

(A氏)

全県の若者会議のメンバーと会う機会があり、鹿角では若い世代が地域について語る場が無いということに気づいた。若い世代で何かできないかということで、全県の若者会議の方からアドバイスをいただきながら、かづの若者会議を結成した。

結成当初は、自分たちで楽しんだことを自分たちの言葉で伝えて、仲間を集めていこうという方向で活動した。一回目の活動として、鹿角市の事業で地域おこし活動をしている八幡平の白欠（しらかげ）集落に伺い、屋根の雪下ろしやピザ焼きなどの活動を行った。この活動により地域の元気な方の姿を見ることができた。

若い世代は便利なモノやお金を稼ぐことに目が向いてしまい、地元には何もないという浅い感覚を持ってしまっていると思う。私自身、奨学金を借りていたもので、秋田で働いては奨学金を返済するのは難しいと思っていた。しかし、今は地域の人を知って世代交流をすることで地域の良さが見えてくると思っている。地域の幅広い世代の人と交流していきたい。

(知事)

来年から、県内に就職すれば奨学金の返済を一定程度支援する制度を始める。

(B氏)

奨学金の返済を一定程度支援する制度は、是非、早く始めてほしいと思う。この制度を始めれば、子どもたちは地元に戻ってくると思う。

(F氏)

Aさんは、様々な場面で社会貢献活動をしている。調理師免許を持っていて料理が得意なので、市民活動の場でその能力を発揮してくれている。

また、いろいろなイベント等に足を運んで、イベントの様子をFacebookで情報発信してくれている。機会があれば御覧になってほしい。

(知事)

PTAの役員について、役員のなり手がいないということをよく聞くが、Bさんのところではそのようなことはないか。

(B氏)

役員のなり手がいないということはある。保育園のころに保護者会等に携わったりすると、その後も小学校・中学校・高校とPTA役員に携わる傾向にある。役員をやってくれる人は慣れていて、頼むと承諾してくれる。活動は和気あいあいとやっている。

(知事)

Eさんの山菜採り代行サービスについて、売り上げが3倍と言うが、注文には応じられているのか。

(E氏)

応じ切れていない。ミズは在庫があるのですぐに対応できるが、他の山菜については予約制で注文をもらってから採りに行くので、注文を早めに締め切ることがある。

県南地域から採れた山菜も商品として取り扱って欲しいという声もある。

以前TBS（株式会社TBSテレビ）の朝の番組で特集をしてもらったとき、ミズの紹介をしたところ反響が大きかった。また、東京の赤坂でミズを使った料理のイベントを開催したところ、初めてミズを食べる人にも好評だった。

(知事)

ミズは都会の人に合うと思う。肉や油に合うので、洋物料理にも合う。ミズはいろいろな食べ方のできるので広めて良いのでは。ミズのむき方コンクールをやってもおもしろそうだ。

大町商店街では、年間どのような行事を行っているのか。

(F氏)

40年近く続いているのが子ども向けの歩行者天国である。あとは、地元の食材を活かした食べ歩きイベントを3年くらい続けている。その時々でテーマがあり、カレーに地元の食材を使ったりしている。今お話を伺っているいろいろなコラボレーションをしたいと思っている。

(知事)

湯沢ではうどんのイベントを行っている。大館ではきりたんぼまつりを行っている。鹿角ホルモンも大々的に実施できないのか。県内他地域と協力し合っとなにかできると良いと考えている。湯沢の全国まるごとうどんエキスポには、湯沢の高校生や商工会の青年部も協力している。

(C氏)

自分でイベントを作るとなると、予算が絡んでくる。人件費や設備費などで費用がかさみ、市の補助金などに頼っている面がある。うどんエキスポではイベント運営側の横のつながりがあり、規模が大きくなっているように思う。鹿角では、ある有志の団体がイベントを仕掛けてもなかなか横のつながりに波及しない。横のつながりができればもっと大きなイベントができると思う。

(知事)

お金の面で、花輪ばやしではどのようにしているのか。

(B氏)

花輪ばやしでは、10町内で寄付金などを募って運営している。花輪ばやしの場合、祭りの期間だけ人口が増えるという側面があるが、それを祭りの期間以外でも定着させたい。

(知事)

地方創生とは、意識の創生でもある。何もないところから何かを作るという発想だ。お膳立てができていれば、誰でもできる。そういう意味で、鹿角では花輪ばやしやホルモンなど名物が出てくる。そのようなイメージを強く出せるとよい。

(D氏)

でんぱくをやってみて、様々なものが出てくる、と感じている。それをプログラムとしてPRしていきたい。

(知事)

秋田県は観光資源はたくさんあるが、何でもあるというのが逆に弱みになっている。

県内でも大仙市の大曲の花火の取組はすばらしいと思う。市民一人ひとりが、花火の大曲の大仙市という意識を持っている。

商工会議所でも花火の会社を立ち上げたが、利益を出すという目的を強く持っている。

地元の集落のエネルギーを集落内だけでまかなうということを目指しているGさん、具体的な取組はどうか。

(G氏)

趣味の範疇を抜けられない面もあるが、集落内でのエネルギー自給率100%もいつかは実現したい。今年1年間の勉強会の日程はできている。

(知事)

大きい規模は、大館などで企業ベースでやっている。集落のある部分の暖房を、集落内の熱エネルギーでまかなう仕組みがよいのでは。地域のローカルエネルギーの実現に向けて、県として手伝えることがあれば要望してほしい。木質バイオマスによるエネルギー供給の課題を林業関係者と協力して考えてみてほしい。

(司会)

Eさんは、先日の参議院の環境委員会（第189回国会環境委員会 6/16）で話題となった。今後の地方創生を考えるうえで、経済を回すための雇用面における考え方はどうか。

(E氏)

会社としてやっているが、従業員はいないという感覚だ。販売は私一人でやっているのだから、山菜を採りに行く人たちに対しては、採ってきた山菜の量に応じてお金を支払っている。

私は、小さいときにおばあちゃんと一緒に山に行ったり畑仕事を手伝ったりというのが好きだったので、農業に関わる仕事をしたいと戻ってきた。小さいときの記憶は大事だと思っている。

中学生や高校生が地元で仕事が無いと感じるのは、親や上の世代の大人が、仕事が無いということ子どもたちに無意識に植え付けているのではないかと。仕事が無ければ仕事を創れば良いというのを、小学生でも中学生でも、小さいときから教育していくことが必要だと思う。

私の母校である小坂中学校で、「ようこそ先輩」という授業で拙い話をしてきた。「大人になったら、皆どこに住んでいると思う」と聞いてみると、殆ど、半分以上が東京・関東で、小坂町・秋田県内にいるという人が、10分の1いるかどうかくらいだった。また、「小坂町の良いところは」と聞いてみると、皆、よくしゃべる。もっと地域の魅力が分かれば、都会に出ても戻ってくると思う。今、インターネットが普及しているので、どこでも仕事ができる。相当大変だが自分で仕事を創ることはできる。

(知事)

仕事というのは、大きな会社のサラリーマンが仕事だと思っている。県北は昔から大きな鉱山があって、それが仕事だった。逆に言えば、そういうところは他に仕事は何も無かった。県南にいけばそうではない。鉱山は無いからお店や、小さい仕事の仕事だった。県北の人たちは、大きい会社に勤めることが仕事と、どうもそう思っているところがある。

(F氏)

Eさんがやっているのは貿易、外貨を稼いでいることで、例えば、今あるお米を外に売って、元手は1,000円だけれども1,500円になるという話だと思う。子どもの教育の話だが、1,000円を1,500円にするような教育を、実践的にできないかという人がいて、商店街のイベントで企画できれば良いなどいろいろと考えている。BさんやCさんも同じように、自分たちという原資があって、原資をいかに増やすかという話を教育の中に取り込んで欲しいと思っているようだ。そういったとき、商店街の手助けが必要なときは、環境を整えたい。

(E氏)

東京とかのお金持ちの子どもは親から教えてもらって、家の庭にシートを広げておもちゃなどを並べて売ったりしている、というのを聞いたことがある。

(知事)

日本人は、おしなべてお金は汚いというイメージを持っている。最近ようやく、商業高校で経済を教えるということを実践している。中学校の社会科でも、ようやく少し経済を教えるところが出てき



た。

**(司会)**

Gさんは、仙台から結婚を機にこちらにこられた。地域を外から目線で、客観視して感じることはあるか。

**(G氏)**

地域にある資源を自覚するということが大事だと思う。都会の生活や都会の子育てスタイルと比較すると、自分の置かれている立場の幸せさがものすごく分かる。私は子どもを向かいのおばあちゃんにお世話してもらったり隣のおばあちゃんに見てもらったりしながら育てている。そういう生活ができると言っただけで、こっちで生活したいという人がたくさんいるはずなので、是非、マッチングをしたい。

楽しい秋田生活をしている人をもっと前面に出してアピールする。旨い酒と美味しいコメがあるだけで良いと思う。そして、自由な楽しい子育てができると言ってもらえれば、鹿角市民が増えると思う。キャラクター化して、秋田県を売ってほしい。

**(知事総括)**

特定のテーマで、いろいろなお話を聞いて、結論は別にして、皆さん方がいろんな考えを持って、それこそ地元の古い重圧をはね返しながら、いろんなことをやっているということで、私も勉強になった。それから、皆さん方がどういう風に地元を考えているのかを聞くことができた。他の地域も含めて、意識の創生、自分たちで意識を持って新しい、それが一歩だと思って、進んでいってもらいたい。我々も振興局を中心に応援したい。ただ、地域で何をすればいいか分からないから、県や市で何かやってくれというのでは動かない。何かをやるうとするエネルギーがあるときに、人は共感するものである。ネットワークもあるかと思うので、一つがんばっていただきたい。世の中、悲観的になることが1番駄目だ。小さな光を大きくしようとする、そこが人間の知恵で、それがエネルギーとなり、光がどんどん伝播していく。これからもよろしく願いたい。

(終了)